

# 五島列島 リレー巡礼記



吉田 智子  
古谷 明美  
関 国子  
福本 理恵子

## 五島列島リレー巡礼記 ①



井持浦教会（五島列島） 撮影：吉田 智子

## 五島列島巡礼の旅 (福江島・下五島編)

社会活動委員会 吉田智子

最初にこの巡礼を企画させて頂き、参加して下さった皆様とそのご家族、お手伝い下さった関さん、古谷さんに心よりお礼申し上げます。

出発日である4月5日天候は晴れ。伊丹空港より福岡空港経由一路下五島・福江島へ渡りました。福江空港からはバスに揺られること約1時間、最初の巡礼地である立谷(たちや)教会跡地へと向かいました。1987年の台風で倒壊してしまったのですが、現在はその跡地に先祖の信仰を忘れない為にと石碑を建てて頂き、野外ミサが行われる様にと綺麗に整備されてあります。今回の巡礼で外せない場所はふたつありました。立谷と三井楽でした。先祖がどの様な経緯で五島に移住する事となったのか、皆様に語る事が出来るためでした。



中央にマリア像のある  
野外ミサ場の入り口に  
ある石碑

1797年頃、長崎・大村藩の五島への移住が始まり出した。当時大村藩上級士族であった鶴田沢右衛門は信仰を捨て切れなかった為、流刑・幽閉されることとなったのだが、当時の大村藩主は慈愛深く、五島福江藩主に依頼した結果、大宝寺というお寺の所有地を与えられたそうである。私財を携えて島へ渡ったものの、貧しく厳しい生活が待ち受けていた。しかしこの寺の檀家として匿ってもらっていたということもあり、ここから先(立谷～井持浦～玉之浦)にかけて信者はいないと役人に告げ、併せて島の特異な地形により身を隠しやすかったようで立谷一帯は厳しい取り締まりは無く、殉教者さえ出ていない。(郷土史・玉之浦による)

秀吉のバテレン追放令から始まり1644年頃にはほぼ信者はいなくなるとされていたのだが、密かに溝(コンフラーリア)として信仰はつながっていたのかと思うと、如何に信仰が深いものであったか思い知らされるようである。

そして当時福江藩とも交流があった先代は、明治維新の政府の動きが容易に把握する事ができた為か、国宝大浦天主堂に続き1878年には日本で2番目に古い立谷教会を建てる事が出来たそうである。当時教会建設にあたっては、信徒10数戸で墓碑のある裏山からナタで木を切り倒し人力で運んだ。鶴田沢右衛門の提案で人家よりも高い位置に教会を建設する事になったようだ。厳しい時代を生き抜いてやっとひとつの輝きを手にした時の喜びはどれだけのものだったか、計り知れない。

私の母方の姓は鶴田であり、この地に生まれ育つ。この立谷教会は母の遊び場でもあった。鶴田沢右衛門からは母で5代目、私で6代目となる。母は9人兄弟の末っ子でそのうち上の3人は聖職者であった。この立谷からは3人の司祭が出ている。幼少のころの話を聞くと五島での生活は貧しかったが信仰によって心は満たされていたとよく語っている。



立谷教会建設のための木材を切り出した星山と墓地



鶴田家の墓標 (吉田さんの祖父母)

9人もの子供を産み育てた働き者の祖母は、私の記憶だと小柄で顔が小さく可愛らしいのだが、時として厳しい顔になるのが印象的だった。

脈々と受け継がれていく信仰は母の愛情でもあるのだろうが、時として逃げたいときもあったろうに…と思うのは私が子供だった頃、御ミサ中の姿勢であったり、一日の中でお祈りの時間をきちんと守る事だったり、厳しい母の躰が体感として残っているからなのだ。しかし墓参りに度々訪れるとそれも懐かしい記憶となり、改めて先祖の偉大さと自分の信仰を顧みる良いきっかけとなっているようである。

墓前にて畠神父様そして巡礼を共にする皆様の祈りは、時を越えほほ笑む先代の顔が浮かんでくる様だった。心より感謝の気持ちを申し上げたいと思います。

そして二つ目の巡礼先、井持浦教会を後にして一路北へ1時間程バスに揺られ三井楽教会～楠原教会へと続く。次第に迫害が各地で起き始め、厳しい弾圧が行われたのがこの三井楽、楠原なのである。殉教者を偲び次の祈りの地へと走り抜けて行く。

途中キラキラ輝く海の向こうに嵯峨島(さかのしま)が見えた。あそこにもクリシタン達は流されて行った。巡礼の旅はまだ始まったばかりである。



台風で崩壊してしまった立屋教会

## 五島列島リレー巡礼記 ②



大浦天主堂（長崎） 撮影：古谷明美

## 五島列島巡礼の旅

古谷 明美

社活より五島列島巡礼を企画していることを聞き、私も行けたら良いなと思いはじめました。それが行ける事になり、神様と家族に感謝しました。なんせ隠れキリシタン、五島列島、ほとんど知らない事ばかり、心ワクワクしながら出発しました。

五島は空から見ても船から見てもそれは美しく、夢心地です。真っ青な海、深緑の山、島々の景色。自然とは何と素晴らしい！ 神様のわざは何と素晴らしい！ 感動です。

その美しさとは裏腹に、この五島の信者が今日まで信仰を捨てずに伝えてきたかについては、言葉では言い表せない苦しさだったことでしょう。

この巡礼には、幸いにも同じ信仰を持つ野中さん御夫妻にガイドしてもらいました。飾らないぼくとつとした言葉ですが、熱い心の内が説明される口からほとぼり出るので。あたかも何百年前にそこに一緒にいたかのように……



牢屋の窄(ろうやのさこ)教会はその最たるものでしょう。明治元年(1868年)の「五島崩れ」の発端となった地にその教会は建っています。この年長崎・浦上で始まった大弾圧はこの地におよび、わずか20㎡の牢獄に幼い子から老人まで約200人が8ヶ月にわたり監禁されました。座ることも動くことも出来ないこの密集地獄の中で42名の方が亡くなりました。信仰を守り続ける事はそれは想像を超えるものと思えます。

島の立地条件や交通の便に良い所は仏教徒が住み、キリシタンは山の上へ、島の奥へと行かされました。小さな島の道は細く坂道が多く、畑は山の斜面に小さな畑が作られています。その小さな畑に網が張ってあります。なぜ？ それは山にいる、鹿やカラス、ヒヨ等が人間が収穫をする前に食べてしまうからだそうです。そんな苦しい生活を営んでいるにもかかわらず、五島には50もの教会があります。



ひとつの教会を20所帯足らずで維持しているところもあるそうです。私達のミサの為に、地元の方がミサと一緒に与って下さる心配りも、とても嬉しいものでした。

ガイドの野中さんご夫妻に、昔教会で使われていたホラ貝を吹いてもらいました。



「ボォ～～ミサが始まるよ～～」 神様から「あなたの信仰は大丈夫～」「私の方を向いていますか～」「私と話してますか～」と、私にはそんな声が聞こえるんです。私の大好きな神様です。五島の方と同じ様にできないけど、私なりに信仰を育てていきたいと思えます。

五島の教会ありがとう。野中さんありがとう。そしてご一緒させていただいた畠神父様と仲間の皆様、ありがとうございました。良い巡礼をさせていただきました。神に感謝



堂崎天主堂（五島列島） 撮影：河原 巖

## 五島列島リレー巡礼記 ③



日本でも珍しい石造り 門柱にお寺のイメージ  
頭ヶ島教会（五島列島） 撮影：関 国子



## 五島列島巡礼の旅

関 国子

五島列島の巡礼の旅で、一番感動したところは、からしだね7月号(五島列島リレー巡礼記②)で古谷さんも紹介されている、久賀島の牢屋の窄教会でしょう。説明を聞いているだけで涙がこみ上げてきました。思いは古谷さんが余すところなく書いて下さっている通りです。同じように、下五島にも楠原教会のすぐ近くに「楠原牢屋」があります。現在の建物は平成8年に元の建物の天井と柱を利用し復元されています(写真1)。ここでは33人が牢屋に入れられ拷問を受けたそうです。迫害をくぐり抜けた信者は30年もの間、こつこつと貯蓄を増やし、土地を買い、大正元年(1912年)現在の赤レンガ造りの重厚な教会を建立しました(写真2)。

五島の教会の建築ですが、50あるうち、35までが鉄川与助の設計と言われています。宮大工だった鉄川はフランス人のド・ロ神父の指導を受け、明治40年冷水教会の建築を手始めに、ゴシック様式の教会を次々と設計施工しました。頭ヶ島教会(前ページ)は両側の門柱に日本の寺を想わせる宮大工の名残を留めた教会です。また、初期の木造建築、レンガ造りの教会のほとんどがリブ・ヴォールト(「コウモリ天井」とも言う)という天井が特徴になっています。(写真3)例：堂崎、浜脇、土井ノ浦、冷水、青砂ヶ浦教会等。他にかまぼこ型天井もありました。(写真4, 5)例：中の浦、頭ヶ島教会など。

天井、壁、ステンドグラスは、幾何学模様と椿の花模様がほとんどでした。五島の教会といえば椿なのだそうです。キリスト教が伝わった時代、日本にはまだバラが無かったので、バラに似ている椿を五島では冬バラと呼んできました。また、椿の実は硬い=信仰が堅い、キリシタンの講(コウとは「組織」のことで水方・帳方・聴方で構成される)が強く崩れない、ということで椿が大事にされているそうです(写真6, 7)。

人物が描かれているステンドグラスは五島の教会群の中で仲知教会のひとつだけです。マタイ福音書がモチーフになった素晴らしいものでした(写真8)。

長崎でキリスト教迫害が厳しくなってきた時代、五島藩はキリシタンを千人受け入れました。受け入れられた千人には生活ができるよう土地も与えましたが、それを聞いて頼って来た親戚や知人2千人あまりには作物もろくに取れない荒れた土地を与えたのです。彼らの生活は困窮を極めました。しかしほとんどの人々は信仰を守り抜くため長崎に帰らず、耐え

写真9 洋上石油備蓄基地



写真1 楠原牢屋



写真2 楠原教会



写真3 リブ・ヴォールト天井

写真上 冷水教会

写真下 旧五輪教会

忍んで開墾していったそうです。その頃キリシタンたちは「バスチャンの4つの予言」を信じ子孫に言い伝えて信仰を守ってきました。

- 1、お前たちを7代目まではわが子と見なすが、後はアニマ(靈魂)の救いが困難になる。
- 2、コンヘソーロ(告白を聞く神父)が大きな黒船に乗ってやってくる。そうすると毎週コンピサン(告白)ができる。
- 3、どこでも大声でキリシタンの歌を歌って歩ける時代がやってくる。
- 4、道でゼンチョ(異教徒)に出会うと先方が道を譲るようになる

1873年(明治6年)禁教令が解かれたとき、五島のキリシタンたちはちょうど7代目にあたったそうです。キリシタン時代のお盆に歌われていた囃子歌をご紹介します。

五島へ 五島へ皆行きたがる  
五島 やさしや土地までも  
五島は聞いて極楽 見て地獄  
二度と行くまい あの島へ

天候には4日間とも恵まれ、美しい海の色に感動しました。神様に感謝!感謝!

巡礼の記事としては横道にそれますが、美しい海の彼方に平成12年に長崎百景に選ばれた「洋上石油備蓄基地」(写真9)が見えました。夜空に反射するイルミネーションは幻想的で大変美しいそうです。緊急事態に備えて日本国内で消費される石油の7日分が貯蔵され、5つある石油槽の内、3槽が常に満タンで2槽はメンテナンスのため半分しか入っていないそうです。

以上は上五島のガイドをして下さった野中夫妻のお話です。

上五島のキリシタンの歴史を深く知る事が出来ましたことを感謝いたします。

今回の五島巡礼の旅は五島の人々の信仰の重さに敬服しました。五島の信者は生活そのものが信仰に基づいているのに比べ、私の信仰はなんと薄っぺらなものかと思いつくづく感じました。でも私が育った家庭は教会中心に回っていたことを懐かしく、また反抗していた頃をほろ苦く思い出したものです。吉田さん、古谷さんをはじめ一緒に旅行できた方々ありがとうございました。神に感謝します。



写真4 青砂ヶ浦教会



写真5 かまぼこ型天井(頭ヶ島教会)



写真6 壁に描かれた椿(中ノ浦教会)

写真7 ステンドグラス(左から冷水教会・鯨賓館・青砂ヶ浦教会) 写真8 ステンドグラス(仲知教会)



## 五島列島リレー巡礼記 ④



三井楽教会 (五島列島) 提供：福本理恵子

## 五島(三井楽教会)を訪ねて

福本 理恵子

下五島北部、外海を見渡すように建つ三井楽教会は、母方の祖父の出身教会である。巡礼旅行への参加は、祖父の生まれ故郷を見てみたいという単純な希望が叶ったものだった。1897年(明治30年)五島に生まれた祖父は99歳で亡くなるまで堅固な信仰を守り、小柄ながら黙々と働く農民であった。小さな頃から要理をよく学んでいて、何を問うても答えを導き出し、一家の信仰生活の模範だったと聞いている。いわゆる「長崎信者」を地でゆく教会の中心人物でもあったが、一方、胸の内については寡黙なひとだったようだ。その祖父があるとき長女である母に「私の親は浦上四番崩れの生き残り」と一度だけ告げている。その言葉は波紋となって母から妹弟へ、そして私たち孫へと伝わっていったけれど、言葉だけが記憶となったまま詳しく聴き取る者もなく、祖父とその兄弟たち7人も亡くなってしまった。だから何の予備知識もないまま、祖父の過去へ旅したようなものである。

五島潜伏キリシタンは、1770年代に長崎大村藩から弾圧を逃れるために移住が始まり、表向き仏教徒として生き、密かにキリスト教を守り通していたのである。初代の三井楽教会は五島で起きた弾圧も終わり、潜伏時代からようやく解放されて7年目、1880年(明治13年)に建設された。信徒の手で木を切り倒して運び、シロアリから守るため鯨脂を塗り、クリスマスに間に合うようにと励まし合いながらゴシック様式の木造教会を完成させた。

信徒数316名で収入の大半を建設に注いだ聖堂は信徒の誇りであり、暮らしていた傾斜地より、更に高台に建てなければならなかった苦労話もまた自慢なのである。現在の教会は、残念ながら1971年ついにシロアリの被害から守りきれず建て直したものである。教会横に建つ資料館が、唯一祖父たち家族の当時を知る空間であったが、写真も粗く古く、墨字の洗礼台帳は鍵のかかったケース展示で、急ぐ旅と夕暮れの明かりでは十分調べることができなかった。しかしひとつ解ったことは、五島では五島崩れといわれる弾圧によって多くの殉教者を出す歴史があり、一方同時期の浦上四番崩れといわれる先祖の体験とは別で、祖父の親たちがこの地にいたことの接点が疑問となったことに気付いた。四番崩れのあと先祖は流罪となり、流配地の五島へ移されたのだと勝手な解釈をしていたのだが、流配先に五島はなかったのである。自分の勉強不足を心から恥じ、上五島を巡る残りの旅では、先祖がどういう経緯で五島へ渡ったのか、帰ったら宿題として調べ直すこと！と心に刻んだことを思い出す。

高齢で記憶に自信がなくなった母は、いろいろな私の疑問に「…だったかもしれない」を繰り返し、叔母にも聴いてみるが母以上には知らないようだった。事実として、祖父の両親は浦上村の出身で、子どもは8人いる。祖父は6番目の子で、5人の兄姉と2人の妹がいた。その兄弟の子ども、つまり母の従兄妹たちの間にも殉教者の話が語り継がれていたようである。祖父が10歳のころ、五島から長崎の大村へ一家で再び移住し長崎で成人している。兄弟の年齢は両親(曾祖父母)の結婚時期がわかり、浦上時代の年齢を探ってみることだった。

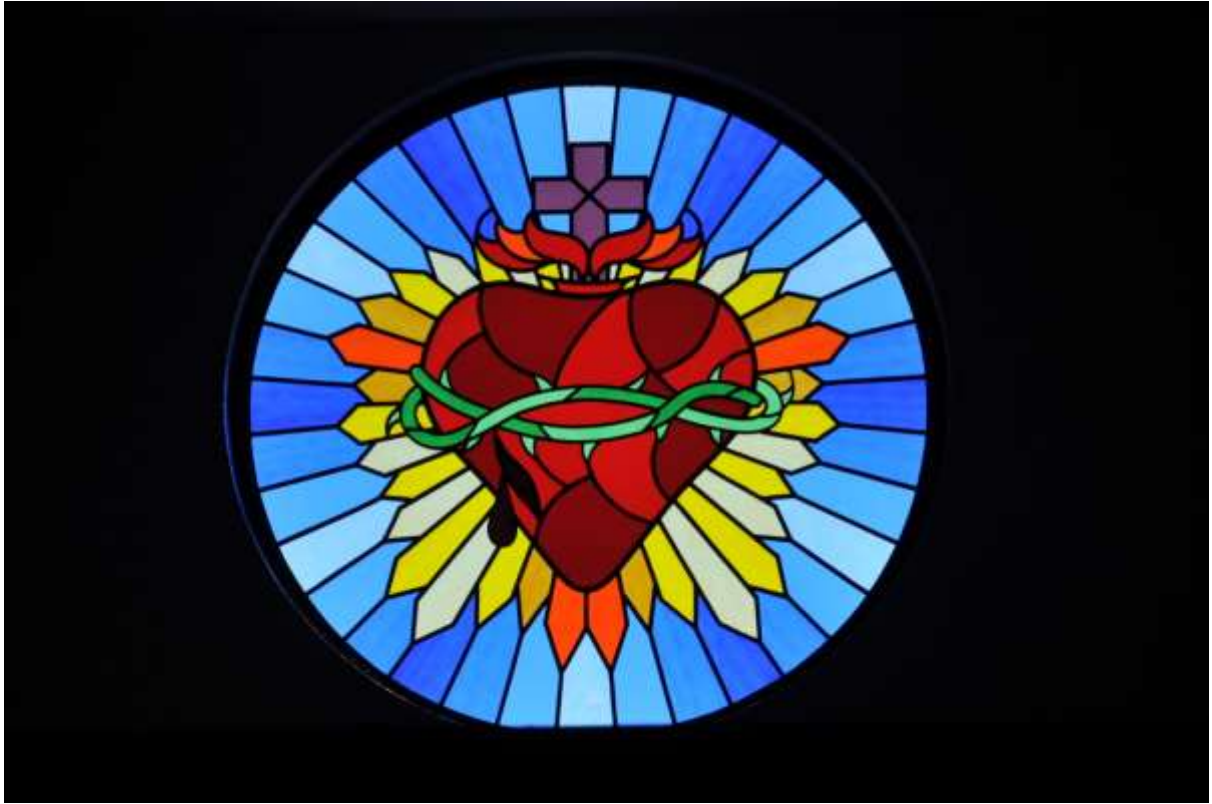
大浦天主堂の献堂によって隠れていた浦上キリシタンたちは、それまでの生活を変え、ついに信仰をあらわし始めたのである。禁教令を布いていた幕府による1867年最後の大弾圧が起こり浦上における四番目の崩れとなった。ありとあらゆる残酷な拷問で棄教を迫られ殉教者を出してなお、一村総流罪となった結果は非情で苛酷だった。浦上のキリシタン3394名は自ら「旅」とよぶ流罪の刑をうけ、3回に渡り全国22の藩に預け置かれる。家族との別れ、流配地での苦しい労働と飢えに耐えながらも結束は固く、第1次流配から6年後、1873年(明治6年)に諸外国の圧力によってようやく放免となった。帰郷を果たしたのは約1900名といわれている。祖父の両親は当時十代で流配地から幸運にも帰郷するが、何年も離れていたためにどの家も荒れ、家財道具も耕す畑も奪われた状態であった。そこで、以前浦上から三井楽へ移住した親戚または知人を頼って五島へ渡ったようである。

五島巡礼センターに問い合わせると、「帰郷者たちが信仰を守り生きていくために、より安心な地、五島へ移り住んだ人たちがいたのです」と答えてくれた。三井楽の聖堂建設当時、曾祖父は働き盛りであり当然かかわっていたと思われるが、詳しくは三井楽教会を再び訪ね、信徒名簿に記されたものをぜひ確かめてみたい。

調べもついに行き詰り悔し紛れに、祖父との会話でなぜもっと詳しく聴き出さなかったのかと母を問い詰めると、その時を思い出すように「そんな雰囲気ではなかった。忘れたい過去の話だったようで、重苦しい内容にそれ以上会話が続かなかった」と話す。祖父の両親、またその親の体験であるため、今では伝えられたものが薄れつつある。一家の辛い苦難の時代だったのだろう。五島へ渡ったいきさつ、また大村へ戻ったいきさつを母があまり記憶していないのは、祖父が熱心に語らなかったこともあるのだ。それでもある時、一言伝えておかなければと責任を感じたのだろうか。祖父が母に話したころは、今のように隠れキリシタンが称えられることもなかった時代である。身内に殉教者がいたことや、両親の苦難の旅を現したくなかったのだろう。先祖がいのちをかけて証明した信念は心の中にあり、自分の信仰を大声で語れる今を喜びとしていたのかもしれない。朝夕と静かに唱える祈りは、祖父にとって重い信仰の遺産を託された家族の姿だったのだ。今になって、穏やかな性格の中の厳しさを感じることができる。いのちをかけて信仰を守り貫く時代ではない今、私の姿を見た先祖がどう思うか想像すると、居たたまれない申し訳なさを感じるのである。あなたの信仰は飾り物ではないのかと、信仰のありようを問われているような気がするからだ。



三井楽教会 昔の聖堂



土井ノ浦教会（五島列島）ステンドグラス 提供:福本理恵子